

特218

p24

い舞台裏

中江良介詩集



始



特218
924



詩集
若山
舞台裏

中江良介



序

僕は中江良介が好きだ。彼の作品が好きなのだ。それは此の先もつと深くなつてゆくに違ひない。諸君はそれを見るであらう。彼のしつとりとした人間ぶりに至つては、僕は更に好きである。曇り陽に水の面が光つてゐるやうな人物の感じ、そんなふうには僕は思ふ。中江はお饒舌ではない、僕の方がまだお饒舌なぐらひである。それでも彼は、常に何か考へてゐるし、感じてゐる。僕たちはあまり話し合ひはしないが、何かよく解り得るやうな氣がする。彼が作品集を出すといふので何かやりたいやうに思ふのだが、僕にはやるものがない。そこで僕は我が貧しい句どものうちから、可愛くて堪らない奴を彼に捧げる。それらの春夏秋冬は、中江良介に對する、こよなき親愛の證據にもならう。

今日も曇り
麥の芽の育ちの遅く

町なかの
ちよつとした森の
あぶら蟬よ

自転車
野づらをいつさんに
きらりと光る

しんとした朝
見知らぬ驛の霏々と吹雪く

一九三七年二月

丸山定夫

櫻は夕映えの中に

あとしばらく経てば古道具屋の老人が拂ひ下げてゆくで
あらう

もう「櫻の園」は私の追憶の風景でしかないのだ

私が立つてその畫面をあちらへ向けると

ここに認められた美しい文字は健康なお嬢さんテーニヤ
その出立をうたつてゐた

さよなら わたしのお家

さよなら 古い生活

私はいくばくかの銀貨を得て一挺の斧を手にいれた

しかし私は貧農出身の實業家ロパーヒンではない

否むしろまるで私は萬年大學生の禿猫紳士トロフィーモ

フそつくりだ

机上に發芽したサムライの善意が何にならう

斧は私に素晴らしいハラキリを迫つてやまない

私の生きる日本の都會にも新しい「櫻の園」が夕映えの
なかで咲いてゐる

さよなら 奴隸のハラワタ

さよなら 古い血族のモラル

事志にたがふとも

帽子がひどく季節はづれであつたり、靴が柄になく磨かれてゐたり、上衣とズボンがちぐはぐだつたり、その癖じつに堂々と歩いてゆく。行き逢ふ人々の顔をまともに眺めながら、胸を張り肩で風をきりながら。ちろちろ振りかへり視てゆくもの、ぼそぼそ噂して囁き合ふもの、いちいちそれらに挨拶などしてゐたら、首がいたくなる、

眼が疲れる。

晝食に三錢の肩パン、夕食に十錢の牛どん。終電もなくなつた夜更け、ごそごそ下宿の二階へ歸つてきて、よれよれに汚れたズボンの鈎裂きをつとる。

かの日、陣頭に赫々の旗を掲げ

この日、泥土に委せられし旗を守らむと

十字路を横切り、橋を越え、相手のタバコを喫みつき、なほも離れ難く討論に熱してゐる、事志にたがふとも還るべき故郷をもたぬ、きみ、ぼく、われら、青年たち！

雨の日

阿木翁助に

騒然と降りやまぬ五月の雨

仲よしの新ちやんの家へお訣れの挨拶をしに行つた、た

つ子はまだ歸つて來ない

雨脚は擦りきれたファイルムのやうに場末の泥濘をながれ
マダムは扉の菱窓からその行方を追ふことにすら軽い疲
れをおぼえてゐる

——お葬ひの花輪をお祝ひの花輪らしく細工して飾りつ
け、やつと息づくやうにして開店した

あれからたつた三箇月

またちりぢりに訣れ去つた喫茶少女たち、——

けい子はまるで日歸りの旅へでも出掛けるやうに若い保
險屋と圓タクで角隠しもしないでお嫁に行つてしまひ
芳子はけい子姉さんの昔を追ひかけるやうに自分で捜し
出してきた新しいお店へ移つて行つた

もう家中に目欲しい小道具は何にもないのだ

據りどころのないひろびろとした土間

壁にかけられたまゝ眞二つに破られてしまったハイキン
グのポスター

——遙かな日本海を越えた入國禁制の國で働いてゐるで
あらう父の歸りをかたく信じて勇しく五月の雨に洗は
れてきた、たつ子よ！

あの人には濟まないけれど、あの人はもう歸つては來ら
れないのだ

あの人が歸つてくるまではと、その證據のやうに育てゝ

きた娘のオカッパを愛撫しながら

あの人の長髪を掌のなかにあたゝかく感じながら
いつまでも見棄てないでと、男の視線に縋りつけば
お互に行けるところまで行きませうと、男の眼がやさし
く應へてゐる

〔燕は雨に濡れて來た〕に據る〕

拾ハレタオ吉サン

オ吉サン

パイイチ嗜キノオ吉サンヨ ユルセ

私ハオ前サンノ悲劇ヲ肴ニシテ

オ猪口イササカ氣負ヒ立チ日本歴史ノ一節ヲ鶉呑ミニカ
カツタ

時は安政

下田港の

翔ぶ鳥おとす

明鳥のお吉

ソノ太陽ノ矜持ガ一夜ニシテ

コノ世ノ涯マデモト契ツタ愛シイ鶴ニ裏切ラレ

ユタカナ青春ヲ賭ケタこん四郎サンニ捨テラレ

寄セテハマツハル白イ眼ニサラサレ

野蠻ナ強權ニハタキオトサレタ熟柿ノ醉態トナツテ

ミヅカラ時ノ敗者ノ嘔吐ニマミレタ

らしやめん

唐人お吉

眺メル人々ノ喝采ハ轉々ノタウチ烈々ノ啖呵ニ生キタオ
前サンノ鐵火ニアツマツタ

ソレダノニ オ吉サン

事實ハ

捨テラレテシドケナク反抗シタオ前サンノ一生ガ
涙モロイ愛撫ノ思想ニ拾ハレテ

見事ニモ人々ヲ満足サセル「叛逆ノ悲劇」ヲ生ンダノダ

トイフ

ア、拾ハレタオ前サンノ作劇術ハ

思ヒガケナク私ノ思想ノ局部ヲ露出シ

オ前サンノ當リ散ラシタかんしやく玉ノ切ナイ火花パカ
リガ

皮肉ニモキリキリト私ノ五臟六腑ニ滲ミワタツテキテ

イマハ中風系ナラヌ啖呵精進ノ流レヲ舐メタイ一心ノ私

デアアル

若い舞台裏

ゴリッキイ追悼公演に

その幕に出ないぼくら若い連中は手の足りない音響効果
の應援に奈落の底へ降りてゆく

ぼくらは各自の部署につき

自信に充ちた首を並べ

ホリゾント際の床穴からブルーイチョフ家のセットの窓を
仰いで合圖する

(用意はいゝぞ)

壁際にかくされた扇風機は頭上に垂れたケレンスキイ内

閣の三色旗に吹きあたり

足下ではレコードがひそかな廻轉を開始する

銅羅が鳴り

舞臺はひらかれる

擴聲機が澄んだ鐘の響きを立て、午前十一時を打つとき

それにダブつて唸りはじめる軍用機の爆音

續いてお椀と樽の辻馬車が鈴を鳴らして過ぎてゆく

ハイモニカの調べはロシア民謡の一節を窓邊に立ち働く
女中の口の端に残して去る

間もなく起るミリタリー・マーチは出征兵士を見送る
街々の花束

シャツとパンツと長靴のぼくらの兵士はマーチに合せ奈
落の底の砂利を踏む

砂利から舞ひ立ちのぼる濛塵は行進を音立てるぼくらの
全身をつゝみ

ぼくらは速やかに消えて欲しいマーチの終りを待つので
ある

あゝ砂利を踏みくたく足音

あとわづか三時間を隔てた大詰にいたれば

この同じ奈落の足音が堂々と隊伍を組んで示威するロシ
ア民衆の行進の嵐ともなるのだ

この朔風吹きすさぶ街頭の叫喚を

死に瀕したコストロマの豪商エゴール・ブルイチョフが
その最愛の娘シュエーラに「葬ひの歌か」と怪しみ問ふ
のであるが

窓から身をのり出したシュエーラは父の死の絶叫に耳もか
さず赤い手巾を打ちふり

その荒々しいロシアの曉の歌に應へようとする

それに和する奈落の歓聲

昂奮した客席に起る萬雷の拍手

おゝはげしい濛塵にまみれた若いぼくらの足音よ！

それらの手助けが終るたび

ぼくらはいそいで嗽をし

聊かなりとも澄んだ空氣をもとめて樂屋の二階へ駆けあ
がる

樂屋の窓の上には

ぼくらがつねに期待してゐる明るさをついぞ快く晴々と
見せてくれた驗しのない秋空がある

だが敢てぼくらは落膽するひまもなく

ぼくらを勵ます鏡に向ひ

次の仕度に取りかゝる

更に偉大な足音を

更に深い濛塵のなかから響かせて

永い下積みの底を行き

全世界にまたがる闘ひの

二列の劍光を投射する

その舞臺の人となるために

風雨強かるべし

青成家傳來ノ裏庭

銀杏ノ木ノ頂キニトマツタ瓢吉クン

(ソコカラ何が見エル)

(何デモ見エル)

高く攀れば

何でも見える三州在

春日遅々と晝寝して

わづか一臺の驛馬車が橋おどろかし渡つてくる

遠くつらなる山脈は浮氣の雲とすれすれに

鎮守の社も

下町も

法六町も一跳びだ

(シツカリソノ調子デトマツトレ)

吉良ノ仁吉ハ死ンダトテ

片肌ヌイデ銀杏ノ幹ヲユサブル瓢太郎

はじめは飜蕩の春風のごとく
やがては一切の造物を破壊してやまぬ颱風のごとく
あばれはじめる瞰下の町々
動轉する平原はるか
村々はすれあひ
點々みだれて緑色のちぎれ雲
必死としがみついた鞆韃のごとく
天と地と
空間にゆらめく
絶叫の

ともし灯!

瓢吉蟬ハ死ヌホド泣イテ
降リテモヒクヒクマダ泣キヤマヌ
(ホシナコトデ男ニナレルカ)
澁面ツクツテ唾吐イテ
ペロリ汗ビシヨノ顔ヲ撫デオロシタ瓢太郎

なほも怯まず
より高きをのぞみ
決然として正視の方に向へば

風雨凜冽

頭角を横殴り

あゝ清爽の笑聲を聴く

(「人生劇場」(序章)より)

挿話

晩秋の二階の部屋に立ちこめた強烈な薬品の匂ひ
川沿ひの窓をひらいて、暮れなづむ江戸川の水面を見や
る

夕陽に彩られた小波はチカチカと疲労にうづくろ眼に溢
れてきて、不覺にも下總の平原は遠く暮色のなかにう
るんでしまつた

あゝ純子！

あの「織匠」の舞臺稽古の夜更け、冷えきつた客席で、

群衆を手傳ひにきてゐた範子が紹介してくれた

ロイド眼鏡をかけた蒼白の顔

骨つばい肩からそつと抜け出してくるやうな軽い咳

下宿の人々は純子が肺患と知つて、彼女らに立退きを迫

つてゐるといふ

二日目の芝居がはねると、彼女らを引取ること決心し

て、範子と一緒に渡しを渡つた

月島へ

深い霧の漂ふ水の上

追ひ立てるやうに冴えてきこえた出船の鉦

寝静まつた裏通り

露地の溝板を踏んでいりこんだ二階の三疊には、垢と汗

とに濕氣てハラワタのはみ出た煎餅蒲團にくるまつて

ちつと暗い天井を見つめてゐた純子の横顔があつた

話しかけたかつたけれど、ついやめて眼をそらしてしま

つた

中等教員で變質者の父

その狂態に耐えかねて、三度目にきた若い母

法科を出ながら就職も出来ず、文學修業を志してゐる氣

弱い兄

弟は放浪の不良少年

好きな繪を描きたい一心に、逃れるやうにして飛び出し

てきた東京ではあつたが、轉々と喫茶店で働くうち、

一層傷みつけてしまった病弱の肉體

この川沿ひの家に來てから更に併發した急性腹膜炎

戀人でもなければ、妻でもない、若い女の子の下腹に絶

えまなく温濕布をしてやらねばならなかつたし、晝間

は土地の小さな新聞社で働き、夕方からは彼女の枕許

に一切の用意をして東京へ出てゆく

きびしい困難な情勢に抗する有能な働き手は次々と抜か

れ、耐久力を失つた人々はそつと何處ともなく退き去

つて、人手の足りなくなつた劇場へ

——仕事

たとへ貧しくとも、全靈全身を打ちこんだ専門技術

與へられた音響効果班の部署を忠實に守りとほさうと、

毎日の不入りを心配しながら、

次第に悪化してゆく純子の病狀をあとにして、——

純子はリンゴが大好きだつた

東京へ出る途中、日課のやうに驛前の八百屋にたのんで
二つ三つ届けて貰つた

おいしい時は切口に紙を貼つて半分とつてくれてあるが、
不味い時にはそのリンゴを縦横無盡に切りさいなんだ
揚句、ぐさりとナイフを突刺した儘ころがしてあつた
醫師がそつと耳うちしてくれた病状をさとせまいとし
て、彼女が喰べのこしたお粥を彼女の枕元ですつかり
舐めてしまつたこともあつたが、無口な彼女がぼつぼ
つ駄洒落が言へるやうになつた頃、遂に獨りで便所へ
降り立てなくなつてしまつた

やつと千秋樂近くなつて大入袋が續き、(いよいよ明日か

ら一日中飽きるほど見てあげられるよ)と、戀人同志
のやうに上氣して四時過ぎまで語り合つた
その明け方、――

戶外ニハ冷イ秋雨ガ降ツテキタ

私ガ二階ヘ驅ケアガルト、ロイド眼鏡ノ私服ガノソノ
ソ隨イテキタ

出來ルダケ落着イテ洋服ヲ着タ

(何デモナイ、スグ歸ツテクル)

(行ツチャ、イヤ)

純子ハ瘦セ細ツタ腕ヲ差シ伸ベテ、私ノ黒イレイン・

コートノ裾ヲ掴ンダ

(行ツチャイヤ)

私ハ力一杯ソノ手ヲ握リカヘシテヤツタ
泣クモノカ、泣クモノカ

二日目ノ午後

範子ガ東京カラ送ラレテキタ

看守ガ純子ノ病状ヲ知ラセテクレタ日

範子ガ歌ツテキルノデアラウ、元氣サウナ歌聲ガ
(夜デモ晝デモ 牢屋ハ暗イ)

同房ノ奴等ガ覺エタガルノデ教ヘテヤル

縣ノ特高課長ガ調べニキタ

餅菓子ヲ喰ベサセタ

冷イ甘イ舌觸リ

純子ハモウ牛乳モ飲メナイ状態ダトイフ

知ラセテクレタ看守ノ後姿

監房ノ丸太棒ヲ力一杯押シテミル

眞夜中、近クニアル調室カラ聞エテキタ範子ノ叫ビ聲

眞實ヲ愛スルモノ

眞實ニ敗レ去ル

ダマレ、ダマレ、私ハ死ナナイ

瀟々タル夕暮ノ雨

食後ノ雑談ヲシテキルト、ドコカラカ、線香ノ匂ヒガ

漂ツテキタ

(ヲカシイナ、イマ時分)

同房ノ奴等ガ顔見合セテ眩イタ

翌朝、私ハ知ツタ

純子ノ死

嘘ト思ヒタカツタガ、思ヘナカツタ

純子

線香ノ匂ヒ

ドウシテモ一緒ニ考ヘタクナカツタ

タトヘ嘘ヲ嘘ト言ヒキレナイ時代デアルトハイヘ

いよいよ釋放すると言ひ渡されても、(あの子は死んでしまつたし、大晦日は間近かだし、今更出たつて暮しやうがありません)と駄々をこねてみたが、結局出されてしまつたのだ

部屋の壁いちめん張りめぐらされた演劇ポスター、大入袋

正面に貼られてあつたレーニンの肖像畫はいつしか冷い権力の手に剥ぎとられてしまつてゐるけれど、十年近く人形芝居で愛用してきた自作のマリオネットたちが、天井から壁を背にしてブランコしながら怪訝さうに見守つてゐる

氣を取りなほして、取り散らかされた書籍の整理にかゝつた

そのとき、ふと眼に觸れた純子の日記らしいノオトの一節

たつた獨りで死んで行きたい

あまい戀唄のメロディをきゝながら

はるか地平線の彼方に黒く消えてしまつた富士の頂き
たつた一度醫師に診て貰つての歸るさ、薄紫の野菊を摘んで、(よくなつたら、一緒に散歩しませう)と愉しみにしてゐた堤の上の白い道

その川底深く不斷の急流を奔らせながら、いまは暗澹たる水を湛えて動くとも見えぬ江戸川よ！

(畏友F・Kのノオトに據る)

ユーナ・ブーボ生誕

若イ人形ハ人間ノ暗イ日曜日ニ明ルイ誕生日ヲ迎ヘネバ
ナラヌ星ノ下ニアツテ
今日ヨリモ明日ニカケテ潑刺トキラメク諷刺ノ彈道ヲ生
レナガラニシテ内包スル
卑劣ナ空襲ヲ物トモセズ視野ハルカ心膽コホル處女地ニ
立ち

恬トシテ大量殺戮ヲ指令スル恥知ラヌ獨裁ノ逞シイ黒色
ノ心臓ヲ狙ツテキル
サレバコソ君側ノ宦官トモガ寄ツテタカツテ新調シタヘ
ヘラ笑ヒノ衣裳ヲツケ

傲然ト練リアルク王様ヲ裸ノ王様ダト笑殺シタ無心ノ幼
童ニ

オ、百年ノ知己ヨ我ガ黨ノ士ヨト跳躍狂喜シテ接吻ノ雨
ニ息ハツマセ

永年ノ盟友タルベキ熱イ握手ヲオクル

素朴キハマリナイ二國ノ協定ハモトヨリ國境ナキタメ忽
チ成立シテ

間拔ケタ牡蠣殻ノゴトキ封建ノ遺訓ヘノ宣戦ヲ布告シ
ソノカミ陋巷ヲサマヨヒ賤民ノ名ニ追ヒコクラレタ藝術
家ノ後裔ハ

闇ノ世ノ生誕ナレバコソ聖純燦タル童心ニ認メラレ
若イ世代ノ英雄ト仰グ旺ナル聲援ノ花吹雪ニツツマレテ
出征スル

鬼面衆愚ヲオドロカス類ノ理論ニハ問答無益ノ薪ザツボ
ーヲモツテ當リ
アラカタノ人間ガ身ヲ持チクヅス喧嘩口論ハ自ラノ質實
ヲ賣リ出ス好機ナレバ

得意中ノ得意トウタフオ家ノ藝
有象無象ノ惡徳ヲハタキトバシテ噴キ出ス血汐ノ流レヲ
同志ノ健康ヲ希フ乾杯ノ料トシ
閑居スル小人ドモノタマサカノ外出ノ前後ニ出沒シテハ
群盜ヨロシク
事モナゲニ氣障ナシヤツボノ剝奪ヲ敢行シテ大イニ笑フ
悪太郎ヲ振舞フノデアアルガ
マタツネニ野ニ在ツテ高邁ヲ恃スル無冠ノ帝王タラムコ
トヲ心得テキル

著者 中江良介 印刷者 谷口熊之助 印刷所 東京市
麴町區土手三番町二九 谷口印刷所 刊行者 東京市中
野區大和町三一三明善莊十五號 玄至人社 原田重之
昭和十二年三月二日印刷 昭和十二年三月十日刊行

頒價三十錢

終

